

### ヴィンセント・スタンリー：

イヴォン・シュイナードの甥であり、『レスポンシブル・カンパニー』ダイヤモンド社を2012年に共著出版。パタゴニアグローバル／マーケティング担当副社長であり、1973年以降、公私ともどもパタゴニアに携わる。近年はパタゴニアのブランド、スポーツ、環境問題を総括的にフォーカス。フットプリント・クロニクル、コモンズレズ・パートナーシップ、パタゴニア・ブックスを立ち上げ、注力している。詩人でもあり、カリフォルニア州サンタバーバラに妻、ノラ・ギャラガーと在住。毎年ノースカスケードでハイキングを、メイン州のコーストでシーカヤックをして過ごす。

### 谷本寛治（たにもと かんじ）：

早稲田大学商学学術院商学部教授。企業システム論／「企業と社会」論を研究テーマとする。学会＜企業と社会フォーラム＞を立ち上げ、会長を勤める。学生時代は陸上選手、100メートルを10秒台で走る夢破れ方向転換。今は週に一度テニスを楽しむ。卒業していったゼミ生の将来の活躍が楽しみで、学生たちへは「どの大学に行っても同じだということはない」、「だがどの大学を出ても結局何をやったかが大事」とメッセージを送る。2013年4月に「責任ある競争力」(NTT出版)を出版。



責任あるビジネスへの最初の実用書

## 「レスポンシブル・カンパニー」

THE RESPONSIBLE COMPANY

イヴォン・シュイナード＋ヴィンセント・スタンリー [著] 井口耕二 [訳]

ダイヤモンド社 定価1,575円 (本体1,500円＋税)

我々の暮らしは自然を脅かしているし、人間としての根本的ニーズを満たせずにいる。世界的に疲弊が進むとともにお金で買えないものの荒廃も進んでおり、我々の健康も経済的繁栄も少しずつ悪化している。どうしてそうなっているのかは、まだ、よくわかっていない。

一方、ここ何十年かでさまざまな新技術が実用化されたことを見ると、創意工夫に富み、状況に賢く適応していくという優れた才能を人類が失っていないこともわかる。人間にはこのほか倫理という観念もあるし、生命に対する慈しみや正義を求める気持ちもある。今後、我々は、このような力をもっと活用して経済活動の進め方を変え、社会正義を全うするとともに環境責任を果たし、我々を生かしてくれている自然や人類共有財産の被害を小さくしていかなければならない。

いまの産業モデルは200年も前のもので、環境的にも社会的にも経済的にも持続不可能になっているが、どのようなものであれ、事業をおこなおうとすれば、産業モデルの現状から逃れることはできない。その現代における事業責任というものを、地球環境が危機的状況にあり、経済も大きく変貌しようとしていることを踏まえて考えなおそうというのが本書である。

本書の著者はふたりとも、40年近く前の創業以来、パタゴニア社にかかわってきた。しかし、パタゴニアの歴史をここで詳しく取りあげることにはしない。パタゴニアの歴史に興味のある方は、イヴォン・シュイナードが書いた『社員をサーフィンに行かせよう』(東洋経済新報社)をご覧ください。

本書はパタゴニアにおける経験から生まれたが、事業の進め方を根本的に変えなければならぬと考えている人々や、パタゴニアと大きく異なる企業で働く人々にとっても参考となるはずだ。また、なにかをつくらしている企業や、パタゴニアと同じようにデザインは自社でおこない、製造は他社に委託している企業を主に取りあげるが、サービスを提供する事業者や非政府組織(NGO)、非営利団体(NPO)なども、働く人々の福祉を高め、環境に対する負荷を小さくしたいと考えていれば本書はとて有益だろう。経営者や管理者だけでなく、仕事をする人全員に参考となるはずだ。いま、事業経営などを学んでおり、今後の長い仕事人生に全身全霊で打ち込み、ベストを尽くしたいと考える学生にとっても示唆に富むだろう。

『レスポンシブル・カンパニー』第一章「生きるために」より抜粋